

平成27年2月27日

学位（博士・言語教育学）申請論文 審査報告書

〈学位申請者〉 氏名 林 嘉純 学生番号 0D503

〈論文題名〉

台湾植民時期初期の日本語教育と「ペスタロッチ主義の教育」の研究

—伊沢修二と山口喜一郎をめぐって—

〈 審査委員 〉

主査 外国語学部教授

石川 守



副査 外国語学部教授

遠藤 裕子



副査 外国語学部教授

小林 孝郎



副査 愛知教育大学副学長

中田 敏夫教授



I. 論文の主旨

1895年、日清講和条約発効に伴い、台湾は日本領となり、植民地教育政策が始められた。そして、伊沢修二によって日本語教育が開始され、台湾初期の教育政策の基礎が築きあげられた。初期の日本語教育に関する研究では、多くの研究者によって伊沢が行った日本語教育はいわゆる「対訳法」とであると語られている。その後1898年橋本武によるグアンの著作の発見と講説により、ある目的を達成する一連の動作を中心とするグアン法が導入され、新たな日本語教育の扉が開かれた。しかし、実施に当たって、グアン法の欠陥が発見され、それを補うために「乙の教授法」が山口喜一郎らが中心となって開発され、『臺灣公學校國語教授要旨』（1900）として出版された。これによると「乙の教授法」とは、「其の物體を觀察せしめたる後、其の物の形状性質重量大小運動及び効用等につき一々土語（台湾語）もて問答し」という翻訳法による「実物を用いた問答法」というものであった。

この語学教授法はペスタロッチの初等教育における教授法である「直観教育」（実物教育 objective teaching）、すなわち「さまざまな事物（庶物、object）や現象を子どもに観察、体験させ、子どもの直観的感覚を媒介にして、教員との問答を通じて、それらの事物や現象に関する名称、形状、機能、用法などを子どもたちに教授する方法」と語学教授法と初等教育の教授法という違いはあるが、酷似していることがわかる。さらに、その際に「國語（日本語）を授けるには、成るべく土語（台湾語）の翻譯を藉らず、直に觀念に結びつけんことを要す。即ち、名詞は直ちに實物を指し、動詞は動作を示し、觀念を確かにしたる後に言語を授くべし」と翻訳法から直接法への志向が見られる。これがその後の現在に至るまでの伝統的な日本語教授法である「直接法」すなわち、「実物を用いた問答法による直接法」の誕生の瞬間であったと言えよう。

この現代に至る日本語教育の基本的な教授法となる「乙の教授法」とは実際どのようなものであったのか、それがどのような背景から誕生していったものなのか、さらに台湾初期の教育体制がどのような背景を持って成立したのか。そこには伊沢、第一回講習員、山口の背景に深い関係があると推察し、それらを探るために、伊沢修二の経歴、伊沢が留学したアメリカの師範学校、そこで行われていた教育、帰国後の伊沢の事跡をたどっている。さらに明治初期の初等教育、乙の教授法開発の中心となり、戦前の日本語教育の中心人となった山口喜一郎の業績をたどっている。そして、これらを基に、この「乙の教授法」が一体どこから取り入れられ、そのような教授理念がどのように形成され、どのような背景のもとに導入されたのかなどに焦点を当て、それらを明らかにすることが本論文の課題であるとしている。

II. 論文の構成

本論文の構成は、次の通りである。

目次

第一章 序論

- 第一節 はじめに
- 第二節 研究課題
- 第三節 研究方法と構成

第二章 山口喜一郎と初期台湾の日本語教育

- 第一節 改良された教授法の背景
- 第二節 「対訳法」から「グアン式の教授法」へ
 - 1. グアン氏言語教授理論
 - 2. 改良された教授法の根本原理
- 第三節 『臺灣公学校國語教授要旨』
 - 1. 山口の『國民讀本参照國語科話方教材』と「會話」の教授原理
 - 2. 『臺灣教科用書國民讀本』

第三章 伊沢の生い立ちと業績

- 第一節 伊沢修二の背景
- 第二節
 - 1. 伊沢の出身
 - 2. 伊沢の経歴
- 第三節 渡台後の経過と業績
 - 1. 台湾初期教育方針とペスタロッチ主義の教育
 - 1.1 「学務部施設事業意見書」
 - 1.2 「台湾学事施設一覧」の「教育体系」
- 第四節 国語伝習所と公学校に於けるペスタロッチの教育理念
 - 1. 「国語伝習所」成立と廃止
 - 1.1 国語伝習所設置の背景と理念
 - 2. 「公学校」設立の計画と背景
 - 2.1 公学校に於ける教育理念
- 第五節 学堂の教授法―「実物教授」と「問答」

1. 学堂に於ける実物教授と問答
2. 言語教授の第一歩―「発音」

第六節 初期教科書の教授法とペスタロッチの言語教授理論

1. 国語伝習所教科用書
 - 1.1 『臺灣適用會話入門』
 - 1.2 『臺灣適用小學讀方作文掛圖教授指針』
 - 1.3 『臺灣十五音及字母表附八声符号』
 - 1.4 『臺灣適用國語讀本初歩上卷』
 - 1.5 『日本語教授書』

第四章 アメリカ留学と「ペスタロッチ主義の教育」との出会い

第一節 米国師範学校の教育理念―「ペスタロッチ主義の教育」

1. ブリッジウォーター師範学校からの影響
2. 教則改正の内容とペスタロッチ教育原理の一考察
3. 伊沢の訳書―『教授真法』『教育学』『学校管理法』
 - 3.1 『教授真法』について
 - 3.2 『教育学』について
 - 3.3 『学校管理法』について
4. 伊沢の教育観とコメニウスとの関連について一考察
 - 4.1 コメニウスの教育観念について
 - 4.2 『教授真法』『大教授学』の類似点について

第二節 高嶺秀夫とシェルドンの実物教授の背景

1. 高嶺の背景について
2. 高嶺とクリュージとの出会い
3. オスウィーゴー運動の背景
 - 3.1 クリュージ・実物教授とシェルドン

第三節 アメリカ師範学校に於けるペスタロッチ主義の教育の普及

1. アメリカの教師養成の歴史
2. ペスタロッチ主義の教育はアメリカに導入の背景

第四節 ペスタロッチの教育原理と各研究者の著書

1. ペスタロッチの教育原理と教授法
 - 1.1 福島論説について
2. カルキンズの著書について
3. シェルドンの著書について
4. ジョホノットの著書について

第五章 明治初期「庶物指教」の背景と発展

第一節 「学制」の背景と発展

1. 学制を創立の背景
2. スコットの「小学教則」の背景
 - 2.1 スコットの背景
 - 2.2 スコットによって導入された「小学教則」の内容

第二節 「一斉教授法」と「問答法」の先行研究について一考察

1. 「一斉教授法」について
2. 「問答」について

第三節 明治初期「庶物指教」に於ける小学校の教科書

第六章 初期講習員の背景と山口の「直接法」

第一節 台湾初期第一回講習員の背景と初期の日本語教案－「初学生徒教案」

1. 第一回講習員の背景
2. 初期の日本語教案－「初学生徒教案」

第二節 山口の背景及び直接法について

1. 山口の学歴について一考察
2. 山口の「直接法」に関する先行研究の一考察
 - 2.1 山口の教授法－「問答」について
 - 2.2 台湾初期「話方教材」と改正された「話方教材」の背景について
 - 2.3 「直接法」に関する先行研究

結章 結論と今後の課題

Ⅲ. 本論文の概要

第一章 序論

本章においては、研究課題、研究方法と構成について述べられている。研究課題は台湾初期にグアンの「甲の教授法」とともに新たに開発され導入された「乙の教授法」という語学教授法の実態とペスタロッチ主義の教育、すなわち初等教育における教授法である「実物教育」(Object Lesson) とに、どのような関連があるのか、更に、伊沢、山口、そして第一回講習員らと明治初期の「庶物指教(実物教育の明治初期の名称)」との関連、それらが台湾初期の日本語教育における新しい教授法にどのような影響を与えたのかなどについて論じることが課題であると述べている。

研究方法是台湾初期日本語教育で編纂され、出版された教科書などの内容、伊沢修二の事跡、伊沢が留学したアメリカの師範学校に関する資料の分析、また台湾初期に伊沢が作成した「系統的な教育体系」の背景とペスタロッチ主義の教育、更に日本明治初期「学期」に導入された「庶物指教」との関連について其々の先行研究と文献資料に基づいて検証している。

第二章 山口喜一郎と初期台湾の日本語教育

「対訳法」から山口が開発した「直接法」への転換の背景について考察している。山口と当時教科書の編纂者らは、グアン法に基づく「甲の教授法」と新たに考案し、改良した「乙の教授法」を1900(明治33)年に『国民読本参照国語科話方教材』と『台湾教科用書国民読本』として出版した。この資料を基にグアン法の根本原理と改良された教授法について考察している。その結果、グアンの教授法と改良した教授法との比較から共通する部分は、言語の学習段階は客観言語(一連の動作)から主観言語(諸事物の概念)へ進み、観念連合により甲(動作)から乙(諸事物の観念)への言語を配列し、学習するということであるとしている。また異なる点は、いわゆる「乙の教授法」であり、「実物を使った問答」法ということである。この「実物を使った問答」という教授法は、実物を観察し、その物の特徴、性質について問答することによって言葉を学習させるということである。これは、アメリカの初等教育で行われていたペスタロッチの教育原理と共通する点である。この改良された新しい教授法は、言語学習を段階的に分け、初期はグアンの「甲の教授法」すなわち、目的を達成するための一連の動作によって観念を喚起し、その後、問答で学習者の状況を確定する。次の段階では「乙の教授法」によって授業を行っていく。初期の段階で学習された具体的な行為に関する動詞と事物の観念に関する名詞などの既知の言語を以て、次に既知の言語を通して新しい言語を学習するために、問答による会話練習で会話

の内容範囲をどんどん拡大させるように練習するということである。この改良された新しい教授法で実際どのように指導していくのかということを検討するために、山口が編纂した「話方教材」と公学校教科書の編纂者が編纂した「国民読本」の内容について分析を行っている。その結果、「観念聯合の法則」、「各動作の一連鎖」、「実物の提示」、「発音の注意」のほかに、「問答」による「会話」の指導といった方法がわかったとしている。この会話による問答の方法は、会話内容の順序を配列し、学習の進度を追って会話内容の範囲及び単語を少しずつ増やすようにするということであると述べている。「国民読本」の内容を分析した結果、指導方法は「話方教材」の指導内容と同じく、ペスタロッチの教育原理に従って構成されているということを指摘している。

第三章 伊沢の生い立ちと業績

山口に先立ち、台湾で初めて行われた日本語教育の方法である伊沢の指導法に現れた「実物を提示」と「問答」とその背景とペスタロッチ主義の教育との関連について考察している。そして、考察した結果、伊沢が策定した「学務部施設事業意見書」と「台湾学事施設一覧」の内容からペスタロッチ教育に関連のある「系統的な教育体系」のような教育方針が見られるとし、このような教育方針を立てた背景には、伊沢が高等師範学校で行った「教則改正」と関連があると推測し、そのことを先行研究と文献の資料に基づいて考察している。その結果、初期「国語伝習所」に使われた教科書及び教授方法はペスタロッチの「音・単語・言語の指導」と見られる技術手段も見られるとしている。また「掛図について各種の問答」という掛図と「対話」の方法があることを明らかにしている。そして、これらの指導法の背後にペスタロッチの「音・単語・言語指導」という基本教授手段があると述べている。

第四章 アメリカ留学と「ペスタロッチ主義の教育」との出会い

1879（明治 12）年伊沢は共にアメリカに留学した盟友高嶺秀夫が提唱した「心性開発を重視するペスタロッチ主義の教育」を基に高等師範学校で「教則改正」を行なった。その背景には、アメリカの師範学校で当時普及していたペスタロッチ主義の教育と大きな関連があると指摘している。このことと台湾初期に伊沢が策定した教育政策と大きな関連があると考え、そのことを明確にするために、伊沢と高嶺が米国の師範学校で受けたペスタロッチ主義の教育とオスウィーゴ師範学校長シェルドンが普及した「実物教授（Object Lesson）」の背景及び高等師範学校で行なわれた「教則改正」の内容とペスタロッチ教育原理について考察している。その結果、高等師範学校で行われた教則改正と台湾初期の教

育政策との関連性を指摘している。さらに伊沢がブリッジウォーター師範学校の校長ボイデンの教師養成の理念から深く影響を受けていること、またボイデンの『教育学』のペスタロッチの教育原則との関連性を明らかにしている。また、アメリカのペスタロッチ主義の教育はコメニウスと深い関係があることが既に指摘されているが、コメニウスの教育原理がアメリカの師範学校の発展と背景とに大きな関連があることを指摘している。また米国の師範学校に普及したペスタロッチの教育原理と教授法とは、どのようなものであったのかについて分析している。

第五章 明治初期「庶物指教」の背景と発展

既に先行研究で述べられているように、ペスタロッチ主義の教授方法は明治初期の師範学校の「小学教則」に「実物教授 (Object Lesson)」ではなく「庶物指教 (Object Lesson)」という名称で導入されていた。それを導入した人物はアメリカ出身のスコット (M.M. Scott) である。スコットが導入した庶物指教と伊沢らの実物教育とどのような関連があるのか、さらに、台湾初期日本語教育に「実物教授」が導入された経緯と伊沢との関係、さらに、山口、第一回講習員らの経歴と背景について考察している。さらに本研究はスコットの背景、明治初期に導入された「庶物指教」の実体と欠点を検討し、明治初期にそれがどのように発展していったのか、またどのような結末を迎えたのか、その経緯を明らかにしている。さらに伊沢と高嶺が導入した真のペスタロッチの教授原理とを比較し、その異なる点を追究している。その結果、明治初期に導入された庶物指教は当時正しく理解されず、問答教授は形式的な「問」と「答」があらかじめ用意され、これを形式的に繰り返すという「注入教授」となってしまう、やがて衰退してしまったという。その後、伊沢、高嶺がアメリカから持ち帰った「心性開発を重視するペスタロッチ主義の教育」が真のペスタロッチ主義の教育として新たに師範学校で展開していくことになったという。

第六章 初期講習員の背景と山口の「直接法」

スコットが明治初期に師範学校に導入した教授法はペスタロッチの教育原理による庶物指教よりも、むしろ同時に導入された「一斉教授法」の影響の方が大きかったことを指摘している。したがって、この考察の結果から「乙の教授法」(実物を用いた問答による教授法)を台湾初期の日本語教育に導入したのは、伊沢であり、伊沢から師範学校でペスタロッチ主義の教育を受けた第一回講習員ら、そして、山口へという一連の流れがあるものを推測している。そこで、この可能性を明確にするために、第一回講習員である高木の残した当時の教案を分析、さらに山口の背景、著書、山口に関する先行研究に基づいて分析

を行っている。その結果、直接的な関連性に関する証拠は発見できなかったが、内容的に伊沢、第一回講習員、山口には、アメリカにおけるペスタロッチ主義の教授法である実物教育という一連の関連性があることを明らかにしている。

結章

結章においては、台湾初期の日本語教育に取り入れられた「乙の教授法」は伊沢、また第一回講習員と山口によって新たに語学教授法として開発され導入された可能性が高いと考えられる。そのことは、アメリカで伊沢が師範学校で受けたペスタロッチ主義の教育を台湾初期に伊沢が作成した教育政策及び教授法などの実績から見て取れるとしている。また第一回講習員の背景について考察した結果から、明治初期の師範学校もしくは高等師範学校で受けたペスタロッチ主義の教育と大きな関連があることがわかった。そして、第一回講習員である高木の教案から師範学校で受けたペスタロッチ主義の教育を持って、台湾初期の日本語教育に導入した可能性があると考えられる。そして、また山口の教授法について考察した結果、ペスタロッチの教育原理に基づく実物による問答という教授法を当時正しく理解ができ、語学教育に応用ができたのは山口であると結論づけている。

また、伊沢のペスタロッチ主義の教育からの影響は、ただ教授法だけではなく、教育原理・精神にまで深く広く及ぶものであり、これらの影響を受け、台湾初期「近代式」の「系統的な教育体系」を築き上げたものであると述べている。日本明治初期の「学制」創立時の背景と伊沢の米国で受けたペスタロッチ主義の教育の背景から「近代式の教育体系」という理想は、伊沢の実行を通して台湾で実現したものと結論づけている。このような「近代式の教育」は台湾のそれまでの伝統的な「私塾」の教育から脱皮し、初めて「近代式の教育体系」へ迎えた嚆矢であったと述べている。

今後の課題として、第一回講習員の背景について、今回は各講習員の学歴・経歴を詳しく調査すること、また、日本初期スコットによって導入された「庶物指教」と、その後の発展は、第一回講習員にどのように影響を与えたのか、当初師範学校で実施されていた「庶物指教」がどのように受け入れられたのか、さらに高等師範学校出身者の多い第一回講習員が持っているペスタロッチ主義の教育と尋常師範学校出身という背景の異なる山口との間に違いがあるのかなどを明らかにしたいと述べている。

IV. 論文の総合評価

論文提出までの経緯

筆者は、2009年4月本学言語教育研究科博士後期課程言語教育学専攻に入学し、修了必要単位10単位はすでに取得済みであり、外国語検定試験（日本語）にも合格している。論文提出時の業績は、中間発表および『拓殖大学言語教育研究』など計9本となる。

本論文は、言語教育研究科博士論文申請規定A日程により進められている。博士論文完成発表会は、2013年12月14日に実施され、論文は2014年5月22日に受理されている。審査委員による論文審査は、2014年12月5日 拓殖大学大学院言語教育研究科論文審査基準に基づいて行われ、判定の結果は全員一致で合格であった。最終試験（口述試験）は、2015年1月9日に実施し、審議の結果「合格」と判定した。

1. 研究テーマの適切性・妥当性について

これまでの植民地台湾での統治初期日本語教育研究は、台湾統治にあたっての伊沢修二の言語政策的な側面が取り上げられることが主だったと考えられる中、新たにその言語政策的な背景を、伊沢のアメリカでの留学経験を踏まえたペスタロッチの教育理念との関わりで論じようとしている点は適切であったと評価できる。

また、その後の日本語教育の中心的教授法となる「乙の教授法」（実物を用いた問答法）の成立の背景を、伊沢のアメリカ留学、そこで受けた師範学校からの影響、さらに明治初期のペスタロッチ教育との関係、さらに、そして「乙の教授法」開発の中心者である山口喜一郎の事績、山口とともに開発に当たった第一回講習員の背景の分析など適切であったと評価できる。

2. 先行研究、文献資料、調査などの情報収集の適切性・妥当性について

愛知教育大学副学長の中田敏夫先生より「神津専三郎」の名は見えるが、これに関する言及がないこと、山口喜一郎は他の講習員と異なる石川尋常師範学校の出身者であることを考えると、高等師範学校論の進め方にやや課題があることが指摘された。また、その他の点でも資料の使い方や論証の仕方にやや飛躍が見られるので、これらの点について加筆、訂正を求めた。

その他の点に関しては、全体的には適切であると考えている

3. 研究方法の適切性・妥当性について

多くの先行研究、資料に基づいて研究を進めたことは、適切、妥当であると判断する。

4. 論旨の妥当性

論文の論旨そのものは妥当であると判断する。

ただ、「台湾初期の言語政策」的なテーマと「乙の教授法の成立」という二つのテーマが並存するため、やや錯綜している部分が見られる。本来の主旨である「乙の教授法」に絞ったほうがより論旨が明快になったかもしれないが、本論文の価値を否定するものではない。

5. 以上の基準を満たしたうえで、全体の構成、言語表現が適正で、「論文」としての体裁が整っていること。

全体の構成など大きな問題はないと判断する。

ただ、細かい日本語の表現に関しては、文法的な間違いや、的確でない表現がところどころにあるので、訂正を求めた。

6. 論文の内容が独創性を有し、当該学問分野の研究に幾ばくかの貢献をなすものであり、また、将来高等教育機関で自立した教育者・研究者としてこの分野で活躍していく能力および学識が認められること。

上記の点に関して愛知教育大学副学長中田敏夫先生より以下の所見をいただいた。

「上記オリジナリティのところでも触れたとおり、今後の台湾植民地統治時期の日本語教育研究に、政策的な観点にとどまらない内容的な新たな視点を投げかけていることに学問的な貢献は認められると判断する。今後、台湾統治 50 年間を通じた日本語教育内容について、研究を進めることを期待したい。そのためには、たとえば、山口が朝鮮、満州で実施普及させた直接法の中身が、氏が本論で述べているようなペスタロッチの教育理念を踏まえたものであったのか、吟味してもらいたい。また、山口については例えば、「コメニウスと山口喜一郎、そして言語教育の普遍性について」（松岡弘氏 2003）や、伊沢については前述の国家教育社との関わりの論考など、最新の研究成果を踏まえ、幅広い視野を持

った研究の取り組みを今後期待したいと考える。」

また、当委員会として、本論文は、これまで台湾植民地統治時期の日本語教育の問題が主に植民地政策的な観点から論じられてきたが、その後の日本語教育の始まりとなる「直接法」の成立に関して、その内的な背景を明治初期の初等教育の方法である「庶物指教」、台湾で日本語教育を開始した伊沢修二の米国留学とそこで受けた影響、帰国後の事績等、また、開発の中心者であり、その後の普及に当たった山口喜一郎、そして、山口とともに開発に当たった第一回講習員の背景や事績等多くの資料を通して分析、考察していることは、今までになく、大いに評価するに値するものと考ええる。

さらに、学位申請者は、在学中に、この問答法を用いた直接法を用いて多くの教育機関で日本人学習者に対して長期間に渡り中国語を教え、大きな成果を上げている。この点も実践的な言語教育の研究者として大きく評価できる点である。

当委員会は、林嘉純氏が帰国後、台湾の日本語教育の場で実践的な研究者、教育者として活躍することを大いに期待するものである。

審査委員会結論

以上述べたことから、本審査委員会は、慎重・厳正な審査の結果、総合的に判断し、委員全員が一致して学位申請者に対し、「博士（言語教育学）」の学位を授与するに値するものと認めた。

